

もかかわらず、そこに神の現実が現存している。救いがそれである。誰が救われるのか。世界が、である。単なる個人ではなく、他者と共に、宇宙と共に救われるのである。救いとは、我々がそこからやって来た永遠との、我々がそこから分たれた永遠との、我々がそこへと帰っていく永遠との再会である。この再会はあらゆるものに約束されている。

そこで我々は要請される。「この世と妥協してはならない」(Do not be Conformed)と。「強くあれ」(Be Strong)と。「考え方では、おとなとなりなさい」(In Thinking be Mature)と。「すべてのことについて、感謝しなさい」(In Everything give Thanks)と。

著者は、「この世」(this aeon)と妥協してはならない、と説く。我々は東洋に住む者として、著者とは異なった歴史をになう者として、異なる宗教と文化の中に呼吸する者として、説教の中でそれらについて具体的に触れてくれたらという感じが無いではない。もっとも宗教については、ティリッヒの“Christianity and the Encounter of the World Religion”という書物が1961年に出版されているので、これが参考になるだろう。ともかく、我々は造り変えられて勇気をもって前進するように、迫られている。

多くの人々に読んでもらいたい書物である。(洪炯圭)

James M. Gustafson, *Treasure in Earthen Vessels,*
The Church As A Human Community, Harper & Brothers,
New York, 1961, 141 pp.

1

ジェームス・グスタフソンは、現在イエール大学神学校で基督教倫理学と宗教社会学を講じている中堅の学者である。彼は、もって生れた天分と、その受けた教育において、宗教的集団の社会的に分析し、検討をなすに適した数少ない学者の一人である。教会についての考察をすすめる際、神学的な理解をもった人々は、教会はいかなる共同体であるべきかという理念を神学的に論究するし、社会学者が教会を対象として分析するとき、教会の制度的な外的な、組織形態を量的にとらえる傾向がある。神学者の教会論には、教会のあるべき姿が論ぜられるが、教会の社会における集団形態の実体は充分に把握されているうらみがある。それに反して、社会学者は社会的現象としての教会のデータを集めて分析をなすが、その宗教的集団の内面的な価値や体験の意味理解に欠けるところがあり、メスで表面をきる事が出来ても、内側からその細胞に交う生命を動的に把握していないことがしばしばある。多くの宗教社会学者によってこの両者の相連関した共同作業の必要性が指適されてきた理由がここにある。たとえば J. Wach, *Soidogy of Religion*, 1944, p. 13)

しかし、実際においては、教会についての深い神学的理解をもち、かつ、手堅い社会学の素養をもって教会のの性格や機能について論じ得る学者は非常に少ないというのが現実である。

グスタフソンは、はじめに社会学を研究し、マックス・ウェーバー、エミール・デュルクハイム、ブロンスロー・マリノフスキー、カール・マンハイム、タルコット・パーソン

ズなどの社会学説を学んだ。その後、第二次大戦には戦争に参加し、つぶさに人間の理解について苦闘し、戦後シカゴ大学神学部に入學し神学を学んだ。ついでイエール大学に移り、主としてリチャード・ニーバーの指導の下に基督教倫理学、宗教社会学について研究をつみ、1955年には、本書の附録としてつけられている「時間と共同体についての考察」(Time and Community: A Discussion)についての論文を提出して、学位を得ている。その後イエール大学に残って教鞭をとっているが、その間、リチャード・ニーバー・D・D・ウィリアムスをたすけて北米における神学教育についての調査をなし神学教育についての書物を編集している。内に情熱を燃やしつつも、着実堅固な態度をもって、学究を続けている。内外からの信頼も厚く、今後の労作に期待のかけられている人である。

2

本書はそのタイトルが示すごとく教会を「土の器」としてとりあげ、教会が人間から成る共同体としての要素をもちながら、神の栄光をあらわす器としての性格をもっていることを検討している。「土の器」ということは、コリント第二の手紙の4章からとられている。「土」というと平凡な、日常性をあらわしており、教会が人間的なさまざまな要素からなっていることをあらわしている。或る点では、土で出来た器は、こぼたれやすいし、やぶれやすい。しかし、それは、土で出来ているが、「器」であって、目的のために用いられるものである。教会は人間の集団であるが神の栄光のために用いられる器であるという理解に立っている。

グスタフソンがとりわけ意図しているのは、この教会の素材となっている「土」、すなわち人間的な要素の冷徹な吟味・検討である。それは、普通の神学的な論議にはあまり出てこないが、実際の教会の活動には大きな影響力をもっている。著者は、人間的な集団としての要素が現実の教会に多分に含まれておることを指摘し、それをつぎの6つの観点から分析している。(1)自然的共同体としての教会(The Church: A Natutal Community)、(2)政治的共同体としての教会(The Church: A Political Community) (3)言葉を共通にもつ共同体としての教会(The Church: A Community of Language) (4)解釈を示す共同体としての教会(The Church: A Community of Interpretatin) (5)記憶と理解こそ共有する共同体としての教会(The church: A Community of Memory and Understanding)、(6)信念と活動をすすめる共同体としての教会(The Community of Belief and Action)。

これらの標題をみた丈では、一見奇異に感ぜられる人々も多いと思うが、少し丁寧に著者の論述に耳を傾けるとき、その教会共同体分析がうがったものであることに気がつく。

3

たとえば、教会を政治的共同体としてとらえる章においては、教会の政治に対する責任を論ずるのでなく、教会自体が一つの組織体としてなんらかの形における政治的制度をもって、多分に、政治的力が働き、政治的な妥協のなされている場所であることを丹念に叙述している。このような叙述は、教会を神聖な「聖徳の交り」の場であり、「神の宮」であると信じている人々には、あまり歓迎されないことである。著者は、エミール・ブルン

ナーや無教会主義の名をあげて教会を精神的にのみ理解しようとする人々の考えをあげ、これらの人々は、教会内の政治的過程を悪、または、この世的な限定性のあらわれとみなしているとのべている。(29頁) しかし、それにも拘らず、教会は一つの人間の共同体である限り、なんらかの形で政治的な形態をもつことを避けがたい、ことを指適している。ちょうど、同じ人々の集団でも、「国家」(State)という政治的形態が強くなり、「国民」(Nation)という、一定の国家を構成する人々としての人的要素が強くなってくると同様に、教会も、その制度的要素と、霊的な交りとしての政治的要素の両者が有するので、一方を強調するあまり、他方を否定したり軽視してはならぬことを説いている。彼によると、教会内における政治的機構とは、教会がいかなる政策や態度をとるべきかを決意する。教会内における相互関係および活動の形態をいう。(31頁) 教会内においても、教会の重要な政策や態度決定のために、教会は決定機関をもち、そこに人を選び、そこで決定された事項を実行に移す執行機関をもち、それにあたる人々を任命したりする。任命された人々は、どの権威に従って行動を律するか、その職に在る間は、その構成員たちの与論、とくに、諮問機関の構成員の意見に非常に敏感であるとか、横にひろがった組織体となっている教会の運営のために官僚的な制度が形成されてくるといったような具体的面を憶せずとりあげ、善悪の安易な判断をなるべく下さずに、その現在とられている状況の適格な把握をなすように努力している。興味深い一例をあげると、教会の政策や態度の決定において、公式の会合における討議以上に、インフォーマルな会合における、きたんのない意見の交換が重要な影響を与えることが多いことが指摘されている(33頁-34頁)。公式には2年に一度開かれる全国の教会の総会で教会の重要な方針は決定されるべきである。しかし、財務から人事にいたる重要事項をととも10日位の会合では処理出来ない。多くの案件は常議員会付託となる。ところが、常議員会もそんなにたびたびひらかれないので常任常議員会にまわされる。そこで、それらの責任をもった人々が、会場あいまにインフォーマルに食事でもしながら語りあう中に、重要な方策の骨子が出てきたり、会議の開かれる目的地への旅行の途次のインフォーマルな談話の中に、重要な態度決定の線が出てきたりすることがある。

これらを直ちに、善いとし、あるいは悪いとして断定するのではなく、どのような形において教会の態度や政策が具体的にくまれているかという政治のプロセスを分析吟味する辛棒づよい態度をもって叙述をすすめている。

このような観点から、日本の基督教団の制度や政治的形態の分析を綿密にしてみることは非常に重要なことであると思う。

4

最後の章(第8章)において著者は、一つのまとめをなしている。そこにおいて著者は教会の社会的要素と、神学的な要素の結合のしかたを検討している。「土の器」としての教会の中には、この両者の要素が厳存することは、ゆるがすことの出来ない事実で、社会的な歴史的な教会の性格と超自然的な性格のどちらかをとるかということが問題ではなく、歴史的な社会的な共同体として、教会はいかなる形態をとることによって「土

の器」でありつつ、「栄光の器」としての役割りを果し得るかという点に問題がしばられてくるわけである。

ここで著者が提示している教会のイメージは一寸変っているが興味深い。教会は「カメレオンの」であるという。(112頁) カメレオンは、自己の主體的な失うことなしに、いろいろちがった環境に対して適応性をもっている。それは、持続性をもちつつ、それぞれの状況にあって自己の形態を変化させてゆくものである。グスタフソンは、「ユダヤ人には、ユダヤ人ようになった。ユダヤ人を得るためである。律法の下にある人には、わたし自身は律法の下にはないが、律法の下にある者ようになった。弱い人には弱い者になった。弱い人を得るためである。……しかし、わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。」というパウロのことばを引用して、教会が現代社会において、人間からなる共同体であることを率直にみとめ、この時代における教会のあり方を探索する方向を示唆している。(竹中正夫)

George H. Tavard,

The Church, the Layman and the Modern World,

Macmillan Co., New York, 1959, 84 pp.

著者のタヴァード神父は、フランスのリヨンやパリで研さんをつみ、現在はマサチューセッツの工業都市ウスターで教鞭をとっている人である。

本書は小冊ながら、とりあつかわれている問題の領域はひろく、いずれもきわめて今日的なものである。内容は八項目にわかれているが以下に列挙してみよう。

The Lay Movement (信徒運動), The Catholic Community (カトリック共同体), In a Technological World (技術社会のなかで), Freedom and Authority (自由と権威), The Church and Totalitarian Society (教会と全体主義社会), Conversion to the church (教会への), The Integration of Non-Catholics (非帰依カトリック諸教会の再建), Judaism as challenge (挑戦としてのユダヤ教)。

タヴァード神父はこれらを評論風の筆致ですすめているが、歴史的、社会学的検討をくわえた神学的著作(カトリック的な意味において)であるといえよう。序文の冒頭にものべられているように、本書はカトリックの信徒運動の人びとにたいし、過去数年のあいだ折にふれて語りかけてきた講演集であって、書下ろしではない。しかし本書には一貫した主張と姿勢とがある。それは現代のカトリック信徒が社会的な実力 (Efficiency, Efficacious という表現を著者は好んで用いている) をもたなければならないと随所で強調していることであり、また著者自身ものべているように、権威をもって (ex Cathedra) 語るようなこととはなく、つねに対話の姿勢をとっていることである。

さて、信徒運動は、一方的に教職の手に委ねられている教会のありかたを、信徒の自発性に支えられた教会へと発展させようという意図にもとづく運動である。この運動がとく